


 書評

櫻山豊夫 著

 知っておきたい **医療監視・指導の実際**

佐藤牧人

医療機関の管理上の問題点や事故に至った経緯などを具体的に示す

今ほど医療機関が医療行為の安全性の確保や院内感染防止対策に真剣に取り組んでいる時代はないと言っても過言ではない。現場の管理者はもちろん医療スタッフ全員が、当たり前のことをいねいに取り組みながら相当の工夫と努力を払っている。しかし、残念ながら事故や院内感染事例は後を絶たず、患者からの苦情やマスコミへの対応に苦慮する状況がみられる。

一方、保健所・行政は長年、医療法に基づく病院の監視(立入検査)業務を行ってきた。ともすると形式的な監視にとどまりがちだった立入検査は、この数年、反省を込めて各自治体で急速に見直しが進められており、本来の目的である良質かつ適切な医療の提供体制の構築をめざした検査のあり方が模索されている。

本書は、長年、医療監視・指導に従事し、また患者中心の東京発医療改革の中核を担って活躍中の著者が、豊富な自験例に基づいて書き下ろしたものである。医療安全や院内感染防止対策に腐心する管理者には適切な管理のための新たな視点を提供し、立入検査に従事する保健所・行政の職員にはきわめて実地的なチェックの要諦を示してくれる。まさに、非常にタイムリーな出版である。

本書はまず、とかく厳めしく受け取られがちな医療監視のねらいがどういうものであるのか、また、どうあるべきなのかを医療法の理念に立って、大変やさしくわかりやすい言葉で教えてくれる。私は著者とともに医療機関への立入検査がいかにあるべきかの調査研究を進めてきた間柄であるが、著者は「立入検査を受ける病院の向こう側には健康な暮らしと安心できる医療を求める患者、住民がいる」という信念の持ち主である。立入検査は医療機関の欠点のあら探しではなく、患者、住民

にとって安心できる良質な医療を確保するための医療機関と保健所・行政の協働作業なのである。このことは医療機関と行政職員の双方で共有していただきたい大切な姿勢である。

本書の特徴は、数多くの事例を通じて医療機関の管理上の問題点や事故に至ってしまった経緯などを具体的かついねいに示しているところにある。各事例の終わりには学ぶべきポイントが簡潔に示されており、非常にわかりやすい。口語調で書かれた文体は、著者と一緒に病院に出かけて検査をしているような臨場感を抱かせるが、行間に医療機関を支援しようとする著者の温かいまなざしと豊かな包容力が感じられる。全体にソフトな語り口であるが、医療法の理念を医療監視を通じて具現化したいという著者の強い信念が見てとれる。

立入検査で監視指導する行政側が手の内をみせることは、従来あまりなされてこなかったことである。しかし検査のルールを透明化し、その目的を医療機関と共有することは、結果として、患者や住民にとって好ましい医療が育つことになり、著者が本書に込めたねらいもそこにある。医療監視員はじめ保健所・行政の職員にとっては、本書は、立入検査の実際がわかりやすく提示されている必読のテキストである。

一方、病院管理職の方々にとっては、本書を通して立入検査の趣旨を理解し、数多くの事例を通して、内部からの視点だけでは気づきにくい、医療安全や院内感染防止の新たな管理のポイントが身に付くと思われる。積極的に医療安全を進めようとしている病院の管理者、そして業務の質の向上をめざす保健所・行政職員の双方にぜひ読んでもらいたい、今の時代が求めているテキストである。

(仙台市健康福祉局参事兼青葉保健所長)

● **A5 240頁 2004 定価3,360円(本体3,200円+税) 医学書院刊**